

氏名(本籍)	おお かわ いち ろう 大 川 一 郎 (鹿児島県)		
学位の種類	博 士 (心 理 学)		
学位記番号	博 乙 第 1,466 号		
学位授与年月日	平 成 10 年 11 月 30 日		
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当		
学位論文題目	加 齢 に 伴 う 知 的 能 力 の 変 化 に 関 す る 研 究		
主 査	筑波大学教授	教育学博士	杉 原 一 昭
副 査	筑波大学教授	教育学博士	太 田 信 夫
副 査	筑波大学教授	教育学博士	新 井 邦 二 郎
副 査	筑波大学教授	博士(心身障害学)	前 川 久 男

論 文 の 内 容 の 要 旨

「加齢に伴う知的能力の変化に関する研究」というテーマに沿って、「知的能力の加齢に伴う変化についての一般像を探る」「特に高齢者を対象にしてその知的能力に個人差をもたらす個人的(非標準的)な要因を探る」という2つの目的のもとに研究が進められた。

まず、本研究を始めるにあたり、第1章においてこれらの問題に関しての先行研究が概観され、それまでの知的能力に関わる成年期以降の研究の知見がまとめられ、本研究を方向づけるいくつかの問題点(検査法や個人的経験の影響についての考察の欠如など)が指摘された。

第2章においては、先に掲げた2つの目的達成に先立ち、「高齢者の知的能力をも測定するための新しい方法の開発」が独自に行われた。

「暗黙の知能観に関する研究<研究1>」では、一般の人の世代ごと(青年, 成年, 老年)にいたく知能観の違いを探った。項目分析, 因子分析をおこなった結果, 青年, 成年をイメージした場合, 「対人的配慮」という対人関係部分と「実務的能力」「社会人としての有能性」「洗練性」という仕事や社会生活を送っていく上での有能さが重視される傾向にあったのに対し, 老人をイメージした場合, 「対人的配慮」「対人関係での積極性」「対人的魅力(温かさ, 人当たり)」等の対人関係面での能力発揮がよりクローズアップされる傾向にあることが明らかにされた。

<研究2>において, テストバッテリーをなす候補問題について高齢者にも適用するという観点から妥当性の検討がおこなわれ, 問題及び小問の選択がおこなわれた。そして, 「3節 新しい測定法の全体的構成」で「テスト実施のための基本的能力」「流動性能力」「結晶性能力」のそれぞれの能力の測定を意図した内容の問題で, 実施法, 用具等においても高齢者にも十分実施できる形式を整えた12の問題からなる1つのテストバッテリーが提唱された。

この「新しく開発された測定法」を用いて, 先に掲げた2つの目的に沿った研究がすすめられた。第3章, 第4章, 第5章では「知的能力の加齢に伴う変化についての一般像を探る」ことを目的として研究が進められた。

第3章の「知的能力の生涯発達的变化・問題別・<研究3>」では, 先に開発したテストバッテリーを16歳~95歳という広範な年齢域にわたって個別に実施し, 問題別にどのような年齢変化が見られるかという観点からデータが分析された。

各問題に対して2要因の分散分析(年齢*性)をおこなった。予想されたように年齢の主効果は, 全問題において見いだされた。各問題の加齢変化については, 全体的にみると, 問題により程度の差はあるにしても直線的

な低下が見うけられた。そして、問題によって異同はあるが、全体的傾向として、55歳まで、75歳まで、それ以降の年齢という低下の3つの節目があることがうかがわれた。

第4章において「知的能力の構造の生涯発達のな変化」が検討された。研究4で各年代ごとに「探索的な因子分析」が行われた。各年代の知的能力の構造の特徴をまとめてみると、16歳～55歳までは、流動性能力と結晶性能力の2次元性を有している。56歳～75歳では、潜在的には、2次元性を有してはいるが、2つの能力は混合化してくる。そして、76歳をこえると、2つの能力は完全に混合化するということが示唆された。この流れは、研究5の「検証的因子分析による検討」においても確認された。

第5章「知的能力の生涯発達のな変化・能力別・＜研究6＞」においては、先の章で集約された結晶性能力、流動性能力を中心に生涯発達のな変化が検討された。流動性能力の場合、55歳までは得点の顕著な低下はない。ただし、55歳を過ぎると加齢に対応して、10歳単位で段階的に得点が低下していく。結晶性能力の場合、55歳までは顕著な低下はみられず、56歳以降も75歳までの20年間顕著な年齢差はみられない。記憶能力では、16歳～25歳がもっとも記憶得点が高い時期であり、26歳～55歳までの30年間は得点に差はない。それ以降、10年単位での減少を示し、76歳～95歳は20年単位での低下が示された。

第6章、第7章は「特に高齢者を対象にしてその知的能力に個人差をもたらす個人的（非標準的）な要因を探る」ということを目的として研究が進められた。研究7と研究10において男女それぞれの非標準的な生活経験の構造が検討された。まず、高齢者の個人的な経験要因が大きく6つの領域に分けられた。すなわち、教育や職業などの個人の経歴に関する〔個人史〕領域、社会生活と家庭生活上の生活経験を中心とした〔ライフ・イベント（人生経験）〕領域、〔現在の生活経験〕領域、現在の〔健康状態〕領域、〔生きがい意識〕領域および〔老化意識〕領域である。これらの6領域の経験内容を問う質問紙を実施し、それぞれの領域ごとに分析を行っていった。多少の異同はあるものの、大枠類似した経験構造が確認された。

これらの経験要因と知的能力（新しく開発された検査によって測定される流動性能力と結晶性能力それらの測定能力を補完する意味で実施されたWAISによって測定される動作性能力と言語性能力）との関連性が、研究8においては男性高齢者を対象として、研究11においては女性高齢者を対象にして検討された。〔個人史〕領域に関わる要因としては、まず、「年齢」が男女を問わずどの能力とも負の関連性を示した。「学歴」「職歴」等を反映する「キャリア」要因は、男性では関連性がみられたが、女性では関連性は示されなかった。〔現在の生活経験〕領域においては、男女、能力間で異同はあるものの、「活動」要因という点では一致して関連性がみられた。「読書」「新聞」要因も各能力と関連性が高かった。〔健康状態〕領域、〔生きがい意識〕領域、〔老化意識〕領域においては、いくつかの関連性は示されたが、共通した傾向は示されなかった。

研究9においては、男性高齢者に対し2年間の縦断研究をおこない、その関連性の変化を検討した。一部を除き2年間では顕著な変化はみられず、その因果関係を確認するには至らなかった。

審査の結果の要旨

本研究は、高齢者を対象とした知的能力を測定する新しい検査法を開発・作成し、それを900名余に及ぶ16歳～95歳の対象者に実施し、加齢に伴う知的能力の変化を明らかにした点に大きな特徴がある。さらに、知的能力の変化に及ぼす個人的（非標準的）要因についても総合的に検討している。

ただ、検査者が多岐に渡ったため検査者の条件を十分には統制できなかったことや高齢者に対しての非標準的な経験についてのインタビュー形式でのデータを十分には分析できなかったことは問題点として残された。

しかし、知的能力を結晶性知能、流動性知能および記憶能力に分けてその加齢変化を分析的に検討している点、知的能力の変化に及ぼす個人的（非標準的）要因を総合的に検討した点については知能心理学の発展に寄与するものと評価できる。さらに、本研究で得られた知見は高齢社会を迎えたわが国のこれからの老人の生活や福祉問

題への解決に示唆を与えるもので、社会的にも意義があると評価された。

よって、筆者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。